

# 死にゆく過程の疑似体験が大学生に与える影響

—自殺の潜在的リスクの観点から—

\*樋口 広 思

## 要 旨

近年、子どもの自殺は増加傾向にあり、社会的課題となっている。自殺予防対策基本法に示されているように、子どもの自殺予防において学校が担う役割は大きい。本研究では、子どもの自殺予防教育の中でも、「命の教育」、特に「デス・エデュケーション」と呼ばれる教育に注目する。デス・エデュケーションには様々なプログラムがあるが、比較的实施が容易な方法の一つに「死にゆく過程の疑似体験 Guided Death Experience（以下、GDE）」がある。本研究では、大学生を対象にGDEを実施し、その体験がどのような影響をもたらしたかについて検討する。加えて、自殺の潜在的リスクの観点によってその影響が異なるかについても検討を行った。検討方法は、自由記述内容のテキスト分析をもって行った。

本研究の結果から、GDEを通じて自身の死の体験を通して、生の意味について考える体験になったことが確認された。また自殺の潜在的リスクの違いによって、GDEによる体験内容が異なる可能性が示唆された。

**Key words：** 死にゆく過程の疑似体験、自殺の潜在的リスク、デス・エデュケーション、自殺予防教育、テキストマイニング

## 1. 問題と目的

平成18年の自殺対策基本法が成立し、現在様々な児童生徒の自殺予防の取り組みが行われている。さらに平成28年の改正で、子どもの自殺予防の取り組みとして、心の健康の保持に係る教育又は啓発等を行うよう努めることが規定され、学校における自殺予防教育の推進があげられている（厚生労働省, 2016）。

近年、自殺者数全体数は減少傾向であるものの、若年層の自殺は横ばいとなっている現状であった。しかしながら、令和2年の児童生徒の自殺者数は、2019年の399人から499人に増加したと発表しており、子どもの自殺は社会的な大きな課題であり、学校における自殺予防教育は喫緊の課題であるといえる（文部科学省, 2021）。

自殺対策基本法改正で示された、心の健康の保持に係る教育又は啓発等の具体的な内容について同法第17条3項で、学校は「各人かけがえのない個人として共

に尊重し合いながら生きていくことについての意識の涵養等に資する教育又は啓発」、「困難な事態、強い心理的負担を受けた場合等における対処の仕方を身に付ける等のための教育又は啓発」、「心の健康の保持に係る教育または啓発」の3点に努めるよう示されている。

これを受けて、文部科学省（2021）は、「令和3年度児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議審議のまとめ」において、様々な自殺予防教育の関わる事項の関係性について示している（Figure 1）。

筆者は特に、「下地づくりの教育」における「生命を尊重する教育」に注目する。

「生命を尊重する教育」は、いわゆる「命の教育」（文部科学省, 2011）と同義と捉えられるが、小池（2010）は「命の教育」について2種類に大別できると述べている。一つは、近藤（2007）に代表される「死を考えることではなく、生を感じることが大切」とする「生」の側面から「いのち」を扱う教育である。もう一つは、得丸（2001）が述べる「死に備えての生き方を考える

\* 宮城教育大学 学校教育運営部会（臨床心理学）

ためではなく、避けられるかもしれない死を防ぐための生きる力を養うために避けられない死を扱う」といった「死」を積極的に取り上げた「死」から「生」を考える「デス・エデュケーション」の2つである。

現在の自殺予防教育は、自殺総合対策大綱改正(2017)以降、様々な困難やストレスへの対処方法を身に付けるための教育(SOSの出し方に関する教育)に代表されるように、そこにある危機に気づき対処し、いかに避けるかという方向性にあるだろう。つまり「避けられるかもしれない死をいかに防ぐか」という方向性にあるといえ、その点でデス・エデュケーションと方向性を一にしているといえるだろう。

しかしながら、実際の教育現場においてデス・エデュケーションは様々な実践が行われているものの(古田, 2000; 西本, 2000; 高橋, 2000など)、まだ実践の数自体は少ない現状がある。その背景には学校現場において「死」を扱うことのタブー視や、カリキュラムへの位置付け、教材の開発、そして「死」を教える教師の意欲と配慮が課題となっている(得丸, 2000)。

自殺予防教育の推進のために、デス・エデュケーションによる下地となる教育が必要ではないだろうかと考える。そのために、デス・エデュケーションの実

践にあたり、学校における「死」へのタブー視をいかに少なくし、多忙な学校現場において、実践が比較的容易で負担感を少なくするかといった点に配慮したプログラムの導入が必要となる。

デス・エデュケーションは大別すると講義中心の教示プログラムと、体験を中心とした経験的プログラムの2種類がある。それぞれ実践する学校状況などの環境において選択されているが、Durlak & Riesenberg(1991)は、経験的プログラムの効果が高いことを示唆している。

デス・エデュケーションの経験的プログラムの中で、学校現場で導入しやすい、つまり特別な場所や設備を必要とせず、かつ比較的短時間で実施できるプログラムとして継続的に取り組まれているものに、五色カード法による死にゆく過程の疑似体験(Guided Death Experience、以下GDE)がある。

GDEは、McCormick & Stu Farberによって開発された医療倫理教育の一手法である。我が国においては2006年にMcCormickが来日し医療倫理セミナーで実施されている(下島・蒲生, 2009)。この方法は、死に向き合うことの多い看護師の養成において活用されており(安藤・八谷・谷・山本, 2020)、その効果

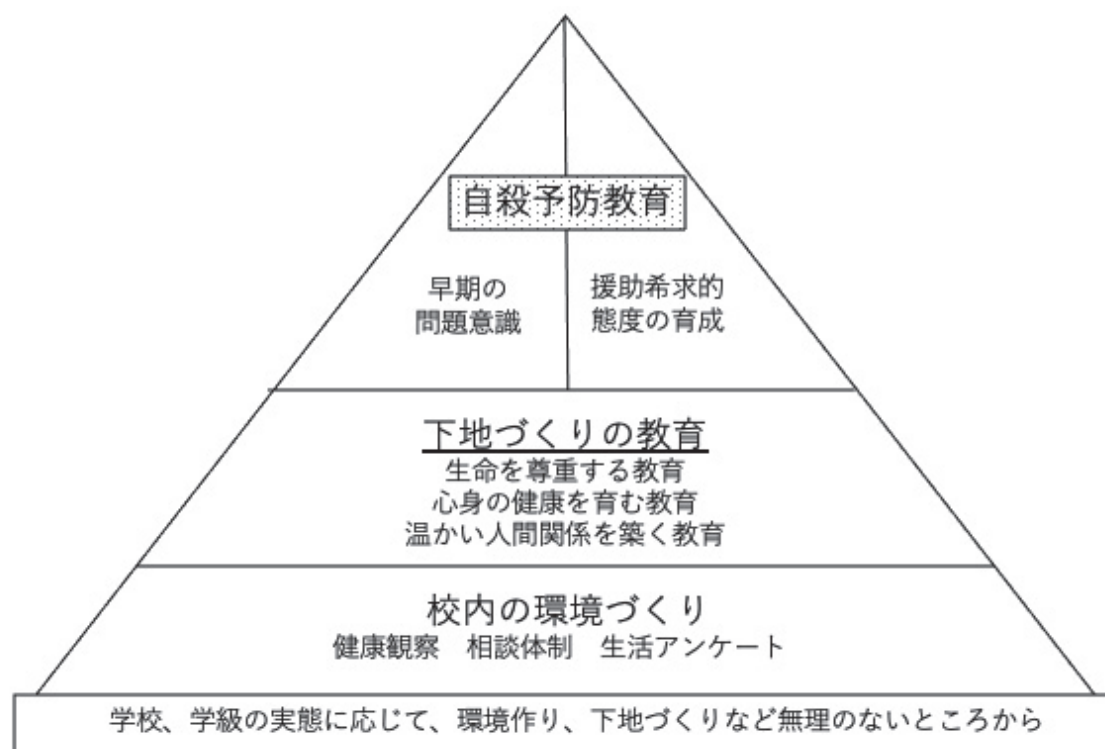


Figure 1 SOS の出し方に関する教育と『自殺予防教育』の関係性(文部科学省, 2021)

についても検証が行われている。下島・石川・島田 (2015) によれば、大学生を対象に GDE を実施したところ、対象者が過去を肯定的に捉え直し、現在を大切にするとした時間展望の変化がみられたという。また下島・石川 (2015) は、GDE の体験を通じた「自分自身の死」という未来の展望が与える影響について検討しており、結果として GDE 体験を通じて現在を楽しむ姿勢に変化が生じたと報告している。

GDE が経験的プログラムで、かつ容易に実施できる点、またすでに看護教育で実施され、安全性にも配慮されている点から、学校教育においても導入しやすいプログラムではないかと思われる。そのような観点から、実際に GDE を学校教育の中で実施するにあたり、どのような意味を持ちうるのかについて検討することは有益であると思われる。

そこで本研究では GDE を大学生対象に実施し、どのような体験が生じるのか、また学校教育において GDE がどのような意味を持ちうるのかについて検討する。

GDE の先行研究において、時間的展望の変化について量的に検討されているものの、質的研究においてはまだ少ない。そこで本研究では体験後の自由記述アンケートからテキストマイニングによる質的分析を行い、検討を行うこととした。

加えて自殺予防教育の観点から、対象者の自殺の潜在リスクの違いによって GDE の体験がどのように異なるのかについても検討することとした。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

2021年7月に国立大学大学生19名に GDE を実施した。実施後に、研究協力の同意が得られた17名のうち、未回答部分があった2名を除外し、15名（男性4名、女性11名）を分析対象とした。

### 2.2 調査方法

筆者が担当する心理学の講義において、グリーフ・ケアの講義の一部として GDE を実施した。

GDE の実施前に、Google forms を用いて、自殺の潜在リスクに関する質問紙に回答を求めた。

GDE 実施後に、研究協力が得られた学生に Google

forms を用いて、「GDE を体験し感じたことや考えたことについて自由に書いてください」と自由記述で回答を求めた。

実施にあたっては、本調査への協力の有無が成績評価とは関係がないこと、調査協力を強制するものではないことを伝えた。

### 2.3 調査内容

本研究において自殺の潜在的リスクの評価がどの程度あるか測定するために行動抑制システム尺度 (Behavioral Inhibition System Scales: 以下、BIS 尺度) を使用した。

#### ・BIS 尺度

BIS 尺度は Gray (1987) の強化感受性理論に基づいて作成された尺度である。福武・菱本・白川 (2011) によれば、自殺の危険因子の中には、社会的因子や環境的因子などの外的な要因と、個人の特性や素因と呼ばれる内的な要因があるとしている。その個人の素因の一つとして、行動抑制システム (Behavioral Inhibition System: 以下、BIS) ・行動接近システム (Behavioral Approach System: 以下、BAS) の個人差、つまり気質の違いを指摘している。この BIS と BAS の両システムの不均衡が、精神病理の脆弱性要因となることが明らかにされている。原田・畑中・川野・勝又・川島・荘島・白神・川本 (2019) は、BIS 得点と BAS-D 得点の差異の測定によって、自殺の危険因子となる自殺念慮や抑うつ症状といったリスクを抱える可能性が潜在的に高いとみなすことが可能であるとしている。

質問項目は BIS/BAS 尺度日本語版 (高橋・山形・木島・繁栞・大野・安藤, 2007) の因子負荷量の高かった BIS 尺度5項目を用いた。回答は「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で求めた。

### 2.4 GDE の実施方法について

#### ・方法の概要

GDE の実施方法については下島他 (2009) に示された McCormick & Stu Farber の方法を用いた。ウォーミングアップや物語の教示については、著者が大学生対象を考慮し教示の一部を改変している。

### ・実施準備

GDE 実施前に「これからあなた自身が死にゆく過程についての疑似体験をします。あなたが終末期の患者となる体験です」と教示した。また GDE 実施中に、気分が悪くなった際は挙手をして申し出てほしいこと、途中で苦しくなった際にはやめて良いことを伝えた。

開始前に携帯電話やパソコンの電源を切るなど体験の妨害を避けるよう伝え、実施の際はカーテンを閉め、カードを記入するとき以外は、部屋の電気を暗くした。

### ・ウォーミングアップ：

10分間、閉眼状態で、呼吸法や野原イメージを想起させるリラクセーション（岡畑・宮下，2005）を行った。リラクセーションの最中に「今の自分から少しずつ時間を遡って、自分自身が小さい頃から小学生、中学生、高校生の頃の自分はどんな自分であったか思い出してください」と教示した。

### ・課題の実施：

リラクセーションの後、開眼するよう指示し、参加者に5色（緑、ピンク、青、白、黄）のカードを5枚ずつ、計25枚配り、1枚のカードに1つずつ自分の大切なものを記入するよう教示した。カードの色と書く内容については教示とともに事前に作成した表を提示した（Table 1）。全てのカードを埋められない場合には白紙のまま体験を進めるよう教示した。

カードは机の上に並べ、実施者がゆっくりと物語を読み上げながら、途中で何枚か机の下に落とすよう教示した。なお下島他（2009）の方法では、カードを机の下に「落とす」ではなく、「投げ捨てる」ように教示を行なっている。これは、GDE では物語の中で多

くの喪失を経験し、悲嘆が生じる過程を経験するが、手の届かないところに失ってしまう象徴としてこの方法を取っていると述べられている。しかし、安藤・八谷・谷多・山本（2020）は、精神的な安定のために「投げ捨てる」方法を取らず、手が届かなくなる方法での実施を行っていることから、本研究では机の下に「落とす」方法を用いて実施した。

### ・物語の概要：

物語は、大学生のあなたの体に唐突に異変が起こり、がんが発見される場面から始まる。その後、入院手術を行うものの再発し緩和ケアを勧奨される場面、そして緩和ケアで残り時間が少ないことを知る衝撃、化学療法の苦痛、そして次第に治療が困難となっていくことを実感する場面、そして死を迎えるという物語となっている。それぞれのエピソードを聴いた後、指示された色のカードを自ら机の下に落とす、また場面によっては隣の席の参加者が指定されたカードを机の下に落とすといった教示を行った。

### ・倫理的配慮

諸外国ではデス・エデュケーションを受けた後、死の不安・恐怖が軽減したという報告と共に、死の不安・恐怖が増加したという報告のいずれも存在するが（赤澤，2004）、明確な結論は得られていない。しかしながら、倫理的配慮から、GDE 実施中および実施後に、気分変容の可能性があることを伝えた。また GDE 実施中のサポート及び実施後に援助が必要な際は筆者に申し出ることやサポートを行うことを伝えた。

## 3. 結果

自由記述の分析にさきがけて、GDE 実施前に行った BIS 尺度に基づいて、自殺の潜在的リスクの高低群に群分けを行った。

BIS 尺度の平均値は17.1、標準偏差は3.53であった。平均得点が18点以上を高群（7名）、17点以下を低群（8名）とし、自由記述の分析を行った。

アンケートの自由記述について、樋口（2004, 2014）を参照しつつ、日本語テキスト型データ分析システム KH Coder（3.Beta. 03d）を用いて行った。

Table 1 五色カードの色と書く内容の対応表

カードの色	書く内容
緑	大切なもの (例：カバンや財布、スマートフォンなど)
ピンク	大切な人 (例：父、母、恋人など)
青	大切な場所 (例：自分の部屋、大学、アルバイト先など)
白	大切な目標 (例：就職、結婚、恋愛など)
黄	大切にしている出来事 (例：友達と遊び、音楽を聴くなど)



### 3.1 自殺の潜在的リスク高群の自由記述

自殺の潜在的リスクの高群における自由記述内容について前処理を実行した結果、85の文が確認された。また、総抽出語（分析対象ファイルに含まれる全ての語の延べ数）は3224、異なり語数（何種類の語が含まれていたかを示す数）は617であった。なお、分析に先がけて KH Coder に同梱された茶筌（Chasen）を利用して複合語の検出を行った上で、抽出された複合語のうち、「五色カード法」を分析に使用する語の取捨選択において強制抽出する語に指定した。

その後、自由記述のデータを基に、関連が強い語の共起ネットワークを作成した（Figure 2）。

KH Coder の KWIC コンコーダンスにより原文を確認しつつ Figure 2 を概観したところ、記述パターンとして、「五色カード法は言葉だけでなく体験できるので良かった」(Community :01)、「最後に残ったカードを捨てる時に少し踏み込んで考えられるような気がした」(04)、「カードを捨てる時に手が重いような感覚があった」(05) など、五色カード法を通じて体験したことの記述や、「カードを残さないことで死んでいくという気持ちを感じることができた」、「死ぬ気持ちを感じて命の大切さを感じた」(02) など、五色カード法を通じて「死」や「命」について感じ考えたといった記述が確認された。また、「目の前にある生きることが分かるような気がした」(五色カード法の)話をきいているうちに（近しい人）の最後、亡くなるときどんな思いだっただろうかと想像した」(03)といった、自分の過去の体験や周囲の人たちを想像するような振り返りに関する記述がみられた。また、「子どもと死について考えることで自殺予防につながるのではないか」(02)といった自殺予防教育に関する記述も見られた。

### 3.2 自殺の潜在的リスク低群の自由記述

自殺の潜在的リスクの低群における自由記述内容について前処理を実行した結果、113の文が確認された。また、総抽出語は3550、異なり語数は641であった。なお、分析に先がけて KH Coder に同梱された茶筌（Chasen）を利用して複合語の検出を行った上で、抽出された複合語のうち、「五色カード法」を分析に使用する語の取捨選択において強制抽出する語に指定した。

その後、自由記述のデータを基に、関連が強い語の共起ネットワークを作成した（Figure 3）。

KH Coder の KWIC コンコーダンスにより原文を確認しつつ Figure 3 を概観したところ、記述パターンとして、「カードを捨てる体験をして大切な人との別れを考え、死ぬことについて感じた」(Community :01)といった五色カード法を通じて「死」を意識したといった記述が見られた。また、「時間の大切さが分かった」(02)、「大切なものを失うことを考えて、生きることについて考えるのだと思う」(04)、「喪失が人間の意志に無関係にやってくるということ考えた」「自分の大切な存在を手放した時の悲観を強く感じた」(06)といった、時間展望の変化や死や喪失から生を考える記述が見られた。五色カード法について「カードを捨てる意味を理解して、死ぬことについて気づいた」(07)、「カードを書くことにも意味があるように思う」(03)、のような方法の意味や分析に関する記述も見られた。自殺予防教育や命の教育について「自殺について、自殺予防教育について知る必要を感じた」(02)、「五色カード法を学校現場で取り組むのは良い機会になる」(03)、「死に目を背けないところに命の教育があると思う」(05)といった記述が見られた。

## 4. 考察

自殺の潜在的リスクの観点から自由記述を分析した結果、高低群いずれにおいても、GDE が経験的プログラムであり体験的に学べることの良さについての記述内容が確認された。また GDE の目的とする、自分の「死」について考える体験になったことが示されている。

同時に、自殺の潜在的リスクの高群における自由記述内容では、自身の身体感覚や、自分の死を想像し「感じる」「思う」といった記述内容が多く見られた。また実際の自分の身近な人の死を思い出し、自身の体験を振り返りながら、その人の死がどんなありようだったかを想像したといった内容も見られた。自殺の潜在的リスクの低群においては、記述内容に「感じる」「悲しい」などの内容も見られたが、同時に「喪失」や「悲観」、「時間」、「大事」など抽象的な概念の記述が多く見られ、自殺の潜在的リスクによって GDE 体験が異なるものになった可能性が示唆された。

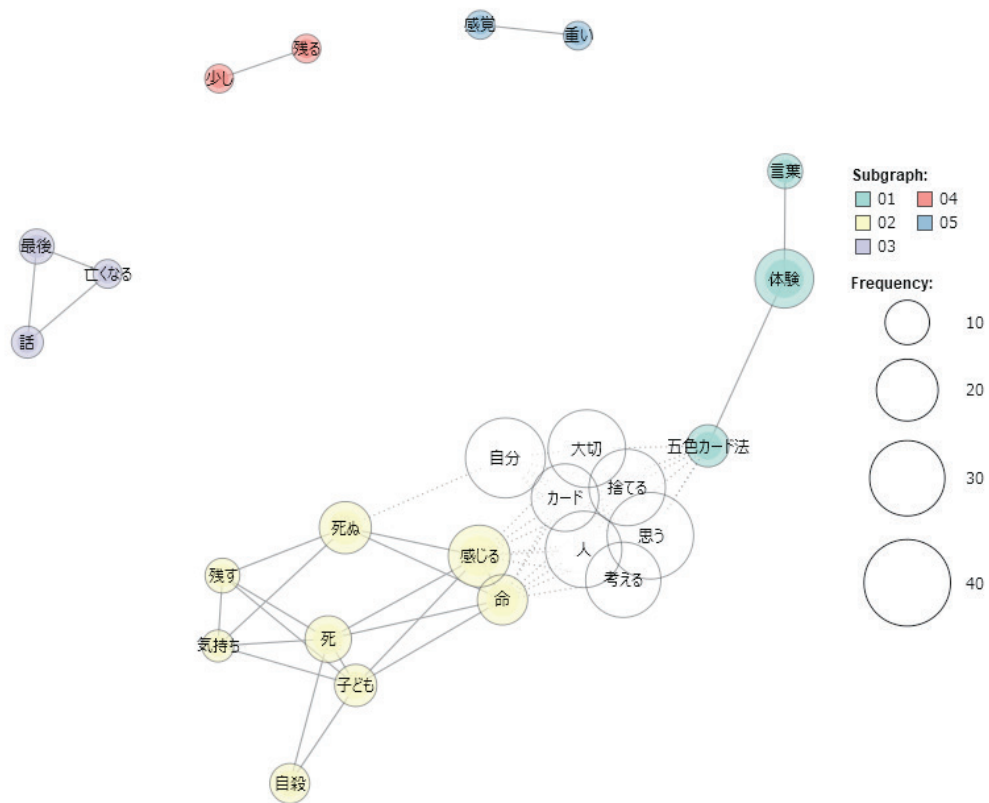


Figure 2 自殺の潜在的风险高群の共起ネットワーク

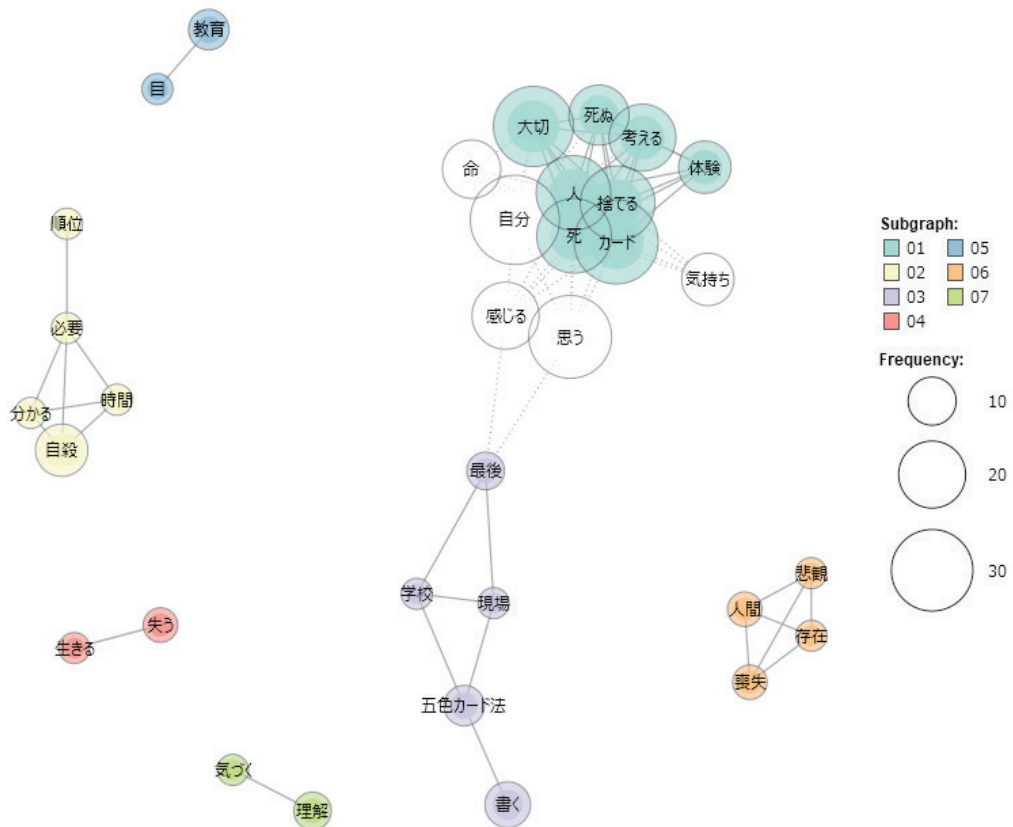


Figure 3 自殺の潜在的风险低群の共起ネットワーク

フランスの哲学者ジャン・ケレビッチ（1978）は、一人称の死、つまり自分自身の死は経験不可能な主観的領域と位置付けている。この不可知性について疑う余地はないが、GDEはその経験不可能とされる一人称の死の疑似体験となっている。さらに、体験の記述内容から、GDEの体験が一人称の死のみならず、自分にとって身近でかけがえのない人の死（二人称の死）や、当事者性を持たない抽象的で一般的な死（三人称の死）につながる体験であった可能性がある。このことから、GDEの体験が目的とする一人称の死の疑似体験のみならず、多様な死の疑似体験になりうることが示唆される。

また、自殺の潜在的リスクが高い人にとって、GDEの体験が自分の体感や自分の周囲の人への思いを巡らすといった内的な連想を引き起こす可能性や、自殺の潜在的リスクが低い人は、自身の体験から関連する事象を俯瞰するような外的な連想を引き起こす可能性が考えられる。岡畑他（2005）では、特定の動作を行った後の想起するイメージの比較を、特性不安の観点から行っているが、動作の違いに関わらず、特性不安が高い人のイメージは自己の内的な感覚や考えといった陳述が増え、特性不安が低い人のイメージは自己の周辺の状況などを俯瞰するような陳述が生じたと述べており、本研究と相似する点がみられる。

以上のことから、GDEの体験によって、死の不安や恐怖が軽減したという報告や、死の不安・恐怖が増加したという報告のいずれも存在すると先述したが、プログラム自体の影響もあろうが、受ける側の気質や状態像によって効果が異なる可能性が推察される。自殺予防教育における留意すべき実施の前提条件として、学級集団や個人レベルのアセスメントの必要性が示されている（文部科学省、2014）。本研究のGDE体験が自殺の潜在的リスクによって異なる可能性が示されたことから、改めて自殺予防教育と同様にデス・エデュケーションにおいても学級集団や個人レベルのアセスメント及びそれに基づく配慮が必要であることが示されたといえよう。

さらに、GDE実施後に体験について感じたことや考えたことを共有したいと筆者を訪ねてきた数名の参加者があった。その中に「周囲に友人がいたので安心して取り組めた」という発言がある一方、「友人の目があったので、泣きたいのを我慢した」との発言もき

かれた。また「嫌な気持ちではないけれど、どう表現したら良いかわからない感じがする」といった言葉もきかれた。

一つのプログラムがもたらす影響は一樣ではなく、プログラム実施後のフォローアップの必要性や、安全で安心な共有の場の必要性が確認されたと言える。学校において、語りたいことを語れる場の準備は実施者単独での対応は困難であろう。導入にあたっては、校内において児童生徒を支えることのできる体制づくりが必要となる。

また、語りたいと思っても語り難い体験が生じる可能性があることについても、実施者が十分に理解していることや、その体験を大事に味わうことができる環境づくりも重要であろう。

## 5. 今後の課題

本研究での研究協力者は大学生であり、GDEの物語をスムーズに理解することができたと思われる。学校において実施する際には、物語自体の構成や、言葉選びなど様々な配慮が必要になると考えられ、今後も検討していく必要がある。

例えば、物語については、自身に見つかった突然の病から自身の死を疑似体験する物語で行ったが、金菱（2020）は、GDEの物語について災害体験に変更して実施している。また一人称の死に関する疑似体験として、入棺体験を行うプログラムについて検討も行われている（河野、2006）。様々なプログラムがある中において、どのプログラムがどのような影響をもたらすのかについて比較検討が今後必要であろう。また、二人称の死についてのデス・エデュケーションプログラムとの関係性や比較検証も必要となるだろう。それらの効果検証にあたっては、本研究から示唆された個人の気質や状態に関する変数も考慮すべきであろう。

学校における自殺予防教育の推進が求められる中において、自殺予防教育へつながる下地づくりの教育、デス・エデュケーションの検討が今後さらに必要になると考えられる。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

## 文献

- 赤澤正人 (2004) デス・エデュケーションの学校現場における展開. 生老病死の行動科学, 9, 75-82.
- 安藤満代・八谷美絵・谷多江子・山本真弓 (2020) 死にゆく過程の疑似体験 (GDE) による看護学生の体験の意味づけと必要と認識した看護. 日本精神保健看護学会誌, Vol.29 (1), 106-112.
- Durlak, J.A., & Riesenber, L. A. (1991) The impact of death education. *Death Studies*, 15, 39-58.
- 福武将映・菱本明豊・白川治 (2011) 自殺の生物学的知見. [張賢徳編「自殺予防の基本戦略」所収, 中山書店.]
- 古田晴彦 (2002) 「生と死の教育」の実践. 清水書院.
- Gray, J.A. 1987 The Psychology of fear and stress (2nd ed.) London: *Cambridge University Press*.
- 原田知佳・畑中美穂・川野健治・勝又陽太郎・川島大輔・荘島幸子・白神敬介・川本静香 (2019) 中学生の潜在的ハイリスク群に対する自殺予防プログラムの効果. 心理学研究90 (4), 351-359.
- 樋口耕一 (2004) テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-. 理論と方法, Vol.19 (1), 101-115.
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-. ナカニシヤ出版.
- 小池孝範 (2010) 教育において「死」を扱う意義-「デス・エデュケーション」再考-. 秋田県立大学総合科学研究彙報, 11, 17-27.
- ジャンケレビッチ, V. 仲沢紀雄 訳 (1978) 「死」. みすず書房.
- 金菱清 (2020) 災害社会学. 一般財団法人放送大学教育振興会.
- 近藤卓 (2007) いのちの教育の理論と実践. 金子書房.
- 河野由美 (2006) 看護学生の入棺体験による死観の変化-Death Education の効果に関する準実験的研究-. 実験社会心理学研究45 (2), 122-135.
- 厚生労働省 (2016) 自殺対策基本法. <https://www.mhlw.go.jp/content/000527996.pdf> (2021.9.23アクセス)
- 厚生労働省 (2017) 自殺総合対策大綱~誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して~. [https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaien\\_gokyokushougaihoufukushibu/0000172329.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaien_gokyokushougaihoufukushibu/0000172329.pdf) (2021.9.23アクセス)
- 文部科学省 (2011) 生徒指導提要. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm) (2021.9.23アクセス).
- 文部科学省 (2014) 子供に伝えたい自殺予防-学校における自殺予防教育導入の手引き-. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/\\_icsFiles/afieldfile/2018/08/13/1408017\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/_icsFiles/afieldfile/2018/08/13/1408017_002.pdf) (2021.9.23アクセス).
- 文部科学省 (2021) コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について. [https://www.mext.go.jp/content/20210507-000014796-mxt\\_jidou02\\_006.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210507-000014796-mxt_jidou02_006.pdf) (2021.9.23アクセス).
- 文部科学省 (2021) 令和3年度児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議審議のまとめ. [https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt\\_jidou02-000014544\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_jidou02-000014544_002.pdf) (2021.9.23アクセス).
- 西本義之 (2000) 「死」を考える学習-地域の実情に合わせて. [鈴木康明編「生と死から学ぶいのちの教育」現代のエスプリ所収, 至文堂.]
- 岡畑広思・宮下敏恵 (2005) 手の左右開閉動作が気分にはばす影響-特性不安の観点から-. 上越教育大学心理教育相談研究, 4 (1), 91-102.
- 下島裕美・蒲生忍 (2009) 医療倫理と教育 (2) 五色カード法による死にゆく過程の疑似体験 (Guided Death Experience). 杏林医会誌, 40 (1), 2-7.
- 下島裕美・石川智 (2015) 死にゆく過程の疑似体験と時間的展望の変化. 日本心理学会第79回大会発表論文集.
- 下島裕美・石川智・島田正亮 (2015) 時間的展望から死について考える. 日本発達心理学会第26回大会発表論文集.
- 高橋誠 (2000) 死への準備教育. [鈴木康明編「生と死から学ぶいのちの教育」現代のエスプリ所収, 至文堂.]
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁枅算男・大野裕・安藤寿康 (2007) Gray の気質モデル-BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討. パーソナリティ研究15 (3), 276-289.
- 得丸定子 (2001) 学校で「いのちの教育」を行う意義. 学校教育研究16, 84-96.
- 得丸定子 (2000) 学校で「死」を教える. [カール・ベッカー編著「生と死のケアを考える」所収, 法蔵館.]

(令和3年9月30日受理)



# Effects of Guided Death Experience on University Students

-From the point of view of the potential risk of suicide -

HIGUCHI Hiroshi

## Abstract

In recent years, child suicide has been on the rise and has become a social issue. As shown in the Basic Law on Suicide Prevention Measures, schools play a major role in the prevention of suicide in children. In this study, we focus on "education of life", especially "death education", among suicide prevention education for children. There are various programs in Death Education, but one of the methods that is relatively easy to implement is "Guided Death Experience (GDE)". In this study, we will conduct GDE for university students and examine how the experience will affect them. In addition, we examined whether the effects differ depending on the perspective of the potential risk of suicide. The examination method was carried out by text analysis of free description contents.

From the results of this study, it was confirmed that through GDE, through the experience of one's own death, it became an experience of thinking about the meaning of life. It was also suggested that the experience of GDE may differ depending on the potential risk of suicide.

**Key words :** Guided Death Experience, Potential risk of suicide, Death education, Suicide prevention education, Text mining